今月のことば

Words of the Month

伝統文化とテクノロジー

日本弁理士会副会長
黒川　恵

１．はじめに

今年の３月27日、文化庁が京都で業務を開始しました。京都は、日本文化発祥の地であり、文化庁の京都移転を心から祝福いたします。

文化庁の京都移転は、様々なものが東京に集中する現状を改め、地方の「しごと」や「ひと」の好循環を促すことを目的として、政府関係機関の地方移転に係る提案が募集されたことを受け、京都が、経済、文化芸術、大学、宗教、議会・行政等が一体となったオール京都で文化庁を誘致した結果です。

京都は、延暦13年（794）10月に桓武天皇が京の地に新都を遷した後、1000年以上にわたって都であり続けましたが、明治２年（1869）３月に天皇が東京に発輦するに至り、その後は御所周辺の町々は狐狸の棲家といわれるほどに荒れました。しかし、博覧会開催や琵琶湖疎水事業の完成等により見事に復興し、現在に至ることは周知のとおりです。京都では、都であった時代の伝統文化が今も残り、連綿と受け継がれ、その一部は現代風にアレンジされてもいます。

以下、文化庁移転を契機として、主として京都の伝統文化とテクノロジーとの関係について考察いたします。なお、ここでは、「伝統文化」について、茶道、華道、能、歌舞伎などの狭義の伝統文化のほか、建築物、仏像、絵画などの文化財、焼物、西陣織などの伝統工芸、さらには文化観光をも含めた広義のものと捉えております。

２．伝統文化とテクノロジーの現状

伝統文化とテクノロジーとは、一見、相容れないように見えますが、切っても切り離せません。実例を挙げながら、特許による保護の可能性を検討いたします。

(1) 文化観光

まず、文化観光において、テクノロジーは不可欠です。

新幹線などの交通手段の発達により、気軽に文化財にアクセスすることの恩恵を受けられるのは現代人ならではです。アクセスに関して、文化財の宝庫である神社、寺院は、山の傾斜を利用して建てられることが多いですが、近年、参拝の便に供するため、エレベータが設置されているところも多いです。また近年、二条城や高台寺において、建築物をスクリーンとしてプロジェクションマッピングを行っており、新たな文化観光として高い人気を誇っています。また、仏像や絵画等は、空調が厳密に管理された展示室内に保存されており、ガラス越しにこれらを拝むところも多く、実物を肉眼で拝むことができないですが、はるか1000年以上前に作成された文化財の劣化を阻止するためには止むを得ません。その他、例えば、京都の法界寺では、本尊である薬師如来像のCTスキャン撮影が実施され、胎内仏の姿が明らかになるなど、新発見も多くあります。さらに、寺院の襖絵などは、現物を京都国立博物館などに寄託しつつ、寺院では高精度スキャナによりコピーされた襖が建て込まれていることも多いですが、スキャン技術の発展により極めて細部までが緻密にコピーされています。

(2) 保存、修復

また、古い寺社の耐震補強もテクノロジーの助けなくして実現することができないほか、壁画などの

「文化財の保護、修復」は近年のテクノロジーに大いに依存しています。1000年以上前の建築物、仏像、絵画などは、虫蝕・腐蝕・漆箔の剥落が多いです。これらは伝統的には漆、膠（にかわ）、ふのりなどの材料が用いられて修理されてきましたが、今日では、科学技術の進展により、合成樹脂などの新しい修理材料が次々と開発されています。

(3) テクノロジーの積極的利用

さらに近年、伝統文化にテクノロジーを積極的に利用するところが増えてきています。まず、京都では八坂神社、鞍馬寺、伏見稲荷大社などがYoutube（登録商標）を通じてオンライン参拝を実施し、東本願寺などがスマホによるお賽銭のQRコード決済によるキャッシュレス化をしていることを挙げることができます。ご利益が薄くなるのではないかとの声もありますが、都合により時間が取れない方や、高齢化社会に伴い寝たきりの状態でも参拝をすることができる点で、他の寺社でも導入されることを期待しております。次に、京都嵐山にある法観寺の鎮守社である電電宮は、電気・電波のまもり神として知られていますが、ここではご本尊である虚空蔵菩薩像の画像データが格納されたSDカードのお守りが授与されています。また、最近、龍岸寺では、阿弥陀如来三尊の模型をドローンに載せ、読経中に飛来させるという取組みが行われています。そもそも、阿弥陀如来は、人々が命を終えるときに極楽浄土からお迎えに来られるとされており、このお迎えに来られる様子を再現したとされています。さらには、高台寺のアンドロイド観音も挙げることができます。このアンドロイド観音は、観音菩薩をモデルにした、法話を行うロボット「マインダー」であり、アンドロイドの「不死性」から、多くの人と出会い、様々な情報をインプットすることにより、永久に進化し続けることを謳っています。最後は、世界遺産の一つである醍醐寺による宇宙寺院の建立を挙げます。京都大学発の宇宙ベンチャーが今年度に打上げ予定のIoT衛星に浄天院劫蘊寺（ごううんじ）という寺の名称の寺の機能を持たせるものです。

(4) 伝統工芸

京都は都であったがゆえに、伝統工芸の匠の技は、朝廷、貴族らの財力が得られるとともに、その審美眼を満足する努力を積み重ねることによって大きな進歩を遂げてきました。清水焼に代表される京焼などの工芸、西陣織に代表される染織、いずれの伝統工芸においても、職人の後継者不足が叫ばれています。近年、後継者不足を補うため、職人個人の経験や知識をデータベース化する試みや、職人の匠の技をセンシングしてデータを収集し、AIを用いて最適な技を見出す方法が実現されつつあります。

(5) 狭義の伝統文化

これらに対し、狭義の伝統文化（茶道、華道、能、歌舞伎）とテクノロジーとの関係は希薄であるといえます。確かに、狭義の伝統文化はテクノロジーを忌避して人間の所作や精神世界と結び付くことに価値があるとも考えられます。しかし、最近、歌舞伎が、最新のテクノロジーと融合した「超歌舞伎」（登録商標）の講演を開催していることは興味深いです。茶道、華道、能、狂言、文楽においても、それぞれテクノロジーとの融合を模索できると確信しております。

3．伝統文化とテクノロジーの今後

(1) 御朱印のNFT化

御朱印とは、神社やお寺を参拝した証として御朱印帳に押印される印章印影です。京都では、大泉寺がアート御朱印NFTを販売し、話題になりました。転売により、寺にロイヤリティが還元される仕組みとなっており、新たなビジネスモデルとして注目されます。

(2) メタバース

メタバース内でのみ運営される寺社の建立や、京都の街並みを丸ごとメタバース内に再現することは、どうでしょうか。そこでは、メタバースの京都に住み、観光をし、イベントを楽しむことができます。私は、このような京都丸ごとのメタバース再現に肯定的です。メリットとしては、第一に、文化財の保護、第二に、観光の容易さが考えられます。第一の点は、リアルの文化財は、応仁・文明の乱などの戦乱、失火などによる大火災、大地震という現実に起こりうる災害により、消失する可能性があり、そのときの代替となり得るものを構築すべきということです。これらのリスクによる文化財の消失をデジタル化することにより永久保存（随時更新）することは、現代の我々の責務かと思われます。第二の点は、メタバース

の京都には、いつでも・どこでも・何度でも、手軽に観光することができるからです。寝たきりの状態でも京都観光することができる点は、有り難いです。一方、デメリットとしては、デジタルデータのコピーが容易であることから高いセキュリティが要求されること、及び、リアル寺社の財源喪失などが考えられます。

４．最後に

以上挙げた現状の実例からも分かるとおり、文化観光、文化財の保存・修復は、テクノロジーが不可欠であり、それぞれの技術分野において特許として保護されることが期待されます。また、テクノロジーの積極的利用に挙げた実例や歌舞伎の実例は、新たなビジネスモデルとしても特許による保護が可能と思われます。そして、今後、デジタル技術のさらなる発展に伴い、伝統文化の世界においても、NFT、メタバースといった新たな局面からの特許による保護が考えられ、興味が尽きません。

以上